

新 0-122



俳諧資料カード

年代

~~文化6年~~

編者

~~淡谷草庵~~

(筆者)

~~鶴本~~

書名

~~士阿~~

備考

ACC 邦国
七喜慶の内
10月

淡谷草庵(蔵)

黄鶴本

好しことごとくまをなくさむるは
 情のあつかりのまをなくすは
 是法之花経
 なる所あるは法を善經ハ
 唯其の善七とせの
 むくを追慕す也

朱橋叟士朗

批七款四上一

法法華經黃鸝品第一

嘗て好む善をせん
 月をくはくはくむ
 ありき
 山階好里ハ
 酢の番
 ありき
 まくこれ好む
 漢を漢る
 漢川
 唯テハ
 長くけく
 たりたる
 杜好
 けり
 一日
 佛一
 かりたり
 白
 漢か
 なる
 あり
 色は
 ハ
 ま
 難の
 目
 好
 見
 なる
 門
 口
 老僧
 好
 あり
 なる
 撥
 ん
 と
 之
 かり

白圖
 岳輅
 士朗
 徐英
 騏六
 白圖
 岳輅
 士朗
 徐英

のりりしきまきしき組板
 古心よきまきしきとちきき枝の風
 くるよ長きまき連よよ海よ
 ちよちよちよ月よ破ふたよもひて
 妻をうめたる海よまきまき
 おあふよまきよ陽よまきよまきよ
 柳よまきまきまきまきまきまき
 奮うまきまきまきの橋まきまきまき
 ちよまきまきまきまきまきまき
 旅人よまきまきまきまきまき
 衣よまきまきまきまきまきまき

批七款四上二

駿六
 昆明
 方明
 白圖
 岳輅
 士朗
 徐英
 駿六
 昆明
 方明
 白圖

草の葉よ髪友をうらむるよちよまき
 ちよまきまきまきまきまきまき
 うつよまきまきまきまきまき
 本戸をまきまきまきまきまき
 今よまきまきまきまきまきまき
 松よまきまきまきまきまきまき
 味嚼よまきまきまきまきまき
 鷲子よまきまきまきまきまき
 ちよまきまきまきまきまきまき
 小まきまきまきまきまきまき
 鴨突まきまきまきまきまきまき

岳輅
 士朗
 徐英
 駿六
 昆明
 方明
 白圖
 岳輅
 士朗
 徐英
 駿六

南無阿彌陀佛と下結を踏込
情くるるもくハ人の心事一也
又々々々々も死う〜きさや
情を花は木の葉と身を焼て
生弱は山をく〜る喜風

昆明

岳輅

白圖

方明

士朗

嘗ては梅ふまき瑞はなかりなり

水雲

士朗

うくひ守ハ〜う〜も鳴り月を梅

き風の里ふて

椿堂

嘗ては梅ふまき瑞はなかりなり

枕七幼四ノ上三

于〜〜〜きさや日

そ〜〜〜よよ嘗の情あやう〜

方明

嘗ては梅ふまき瑞はなかりなり

徐英

うくひす命朝日は早きさや

羅城

嘗の居もふ〜ぬふ〜

玉湖

嘗ては梅ふまき瑞はなかりなり

壽麓

うくひはの牙ハ〜さ〜

杜常

嘗ては梅ふまき瑞はなかりなり

槐圖

うくひすの心爾ふ〜けたる山を色

自樂

宗祇の筆と〜古〜持つ〜

そ〜〜〜人の心〜

雪のふかきん雪の後の水経冊
うらひすふ家遠くもや雪の際
雪のふきよりさりてぬの枝
うらむ雪の降るもさるぬ目撃
雪のや雨の暮山晴るる

竹有
素剛
猿左
岱青
墨山

青柳品第二

ぬの中よ四五本並ふ極小
柳見せしむるを老人の老るる

方明
櫻堂

枕七紙四上四

笠寺早雪をさるる雪山
訪ふ途中の口号

雪柳や日も暖そあつたり
川とち雪降柳よりり外
雪のちや雪をさるる初る雪柳
つらぬの柳ふりり小池
雪の柳ハまらり雪ふりり
雪柳農をさるる雪川
雪柳ふりり月の中
月ふりりハ柳つらりり雪

騏六
入素
素外
天老
百池
大阜
魯雄
棋價

寄白園老人

柳種一人思ひくちるまうか
 昔は木まゝの隙を登り
 引かきりし柳の常こゝろ
 春の東の雲ふ柳の一色しり
 昔は木まゝの隙を登り
 夕柳の常こゝろと日あてしむり

九成
 大江丸
 素兄
 岳輅
 士朗
 亜満

梅花品第三

春のてくるのあしはなを梅の

羅城

七次四ノ五

雪消くちる葉戸はさしと
 何ひらのまゝくぬきの夕曇り
 月影あかりあしりしをぬく
 ちろくくと桂の葉子をわく
 算見のあふあをるる菊の香
 四方山のまゝをそのあしりし
 寺まゝのりその破障をわく
 きぬくしあかきまゝ人の心
 耳搔ゆりしあしりしかりきり
 ちろくまゝのあしりしあしりし
 麻の衣を被くし

士朗
 岱青
 岳輅
 桂五
 少汝
 斗入
 羅城
 士朗
 岱青
 岳輅
 桂五

中々志ありし命をこのの浪のと
 所裏に於て此のうらるる藤陸大
 衆ももや守る量をとたてこりて
 月より出ることなく 桂 鳴南より
 石のうらち一里と二里も峯の巻
 六田に於て此の量と一陽 せり
 僧正のともやまをり言物頼魂
 竹に於て病を拂ふとせり
 むらむに於て此の後のを命ぬきて
 精船に於て毎言せり
 草外のやもとせりぬふ龍也り

七七次四上六

少汝 斗入 羅城 岳輅 岳輅 斗入 少汝 岳青 士朗 羅城 斗入 岳青 岳輅 桂五 羅城 岳輅

あらうに於てふあつるを後 白
 三つりての此をてゆん朝白山
 此をてよと此をて早合と此をて
 志と此をて月を隅より出はるる
 芙蓉に於て此のひり佛一とま
 うらふせて是は袋のうらむ守椽の
 鶏のやまけまにやあまのひり
 葉子と此をて神うらむはてすは
 けりて此をてこの心とふらう
 まうらと此をてまふやと牛の音
 百とて此をてまふらうふり

岳青 士朗 桂五 少汝 士朗 羅城 斗入 岳青 岳輅 桂五 羅城 岳輅

花よりけし平裏葉よくしふ難ふなり
葉よりけし中よりけむちなり

斗八
少汝

蒼葉の先びとらやせその梅
つらなるは梅とてぬくぬくなり

天老
旭雲

お路の社前あり

う免の花白きハ氷のふり南
吹りふんよとてを留め梅の花
うりりあきくをせハ一輪梅はあ
鳥探らふ節ふくをけりうめのはち

長舟
玄光
阿松
柗莊

九七の四上七

梅の香や妙の彩帯ハ寸けたきと
う免うまお畑る夕の山崎外
横忘ふ梅のつらく守雀うま

竹有
杜石
士峰

春宵一刻價千金

梅の葉よりけし年高のそり
岩井ふ雲あうり梅のそ
老木は梅ちうりつらく高
よむを其のそり梅の葉のそ
お梅のそり梅のそり梅のそ
静波はふら梅のそり梅のそ
さく梅のそり梅のそり梅のそ

松兄
大魚
逸漁
卓池
文兆
月居
外六

うらんとくはやはらまつくせきこの世と
元志めて月いへてくまも梅の花
うめうき香やをまくと月のをりも
枯井垣ふとのふりて守きて小茶
あつまつてあつて女のまゝのとらふ
やんとつらふ

うら
呂利
左誥

梅う番ふぬきてもんをき月後
お山り梅見ふゆらん十束とあふ
音は梅増葉の座も白あつ
山里ハ狭きものうりうをの毛
あつて梅あつてとらふる外

青森
方朔
冬彦
騏六
白図

ひらけはうこくやう中梅のふ

素傑

春雪品第四

春ふれ言梅の笠ふけもさう
春風ふれまううけたる小言哉
おもふやとふぬもあつて小言の言
忘るのへ後方ふ新幹一けのそ

自樂
桂五
松兄

あつて言の障ふけをくもあつて
素傑うらむとる合書夏いゆりて

紹鳳

伊勢浦や波多きき海苔喜の若
古寺や春の雲ふり月よ
春よ香浦に答辱もたたく
そらの雲横のハ老のちりくろの
風流の底をぬけたり春の雲
香籠や雪百に朝の志のふま

自徳

素郷

斗入

杜丸

藤圭

彪門

朧月品第五

月出く休一志をみ腫う南

趙鬼

あまらーし紙扇拾ひぬまの月
をききや腫るるる月夜哉

魯隱

岳輅

舟中

おもしろ月ま向ふありぬ男山
あまーく

昆明

存よりハわーしきりおもしろ
春よ月流ゆくりり川
腫よりさきひゆくりり月夜
さきよるらハ流るるる月
人好まきく流ゆくりり月
砂示宵く君おも似たり腫月

如高

可重

青霞

空阿

素葉

芦涯

水新塚

兼陰のあやつく後におもる月
新をくく人も這出たおもる月
山を新座あなをくくおもる月
かーいつて夜はあゝ集りぬ睡つき

素外
紀風
重羽
桂五

鳴蛙品第六

漸くまへ人ふたをよきをくく蛙
写出く田あゝをふ守蛙をく

蕉雨
大阜

雪ととり雨とまりオハ鳴蛙
蛙るく池のあちこちあやもぬ
蒼白雪の底はまをけり啼うつ
鳴蛙丸まけり蛙ハあうりく
豊川とくふ雨よ日とくくくく
るた〜ひみ蛙写あち山あうを

白圖
子繩
墨山
芦丸

浪戸山あゝ

蛙るく垣をまの木の葉外
空まり〜い〜お〜ま〜と鳴蛙
山吹みさりの蛙のよき〜の月

岱青
友國
入素

帯梅

陽炎品第七

あけろのや所ふりと落る鴨牛
机張ちりををららふまゝ
大せつなむる古橋の雲居て
浪のきこゆる音のあはれ
ゆゑのきこゆる音のあはれ
御案本の多き宿の秋風
まきまき花莖を平たらし刈拵
大飼とあり温泉ハ河沿を

士朗

岱青

帯梅

紀鳳

大阜

墨山

岱青

士朗

紀鳳

帯梅

墨山

大阜

士朗

岱青

帯梅

紀鳳

大阜

墨山

岱青

尾形前の旅の袂もををを
眠ふ影さけををを
むさんや五馬ふきしる部
隙に草あかしく元の中
月夜き吹草系ををを
福踏かかろ悪のありさ
来はしりろろきををを
志はしりろろきををを
山崎はををををを
年ををを六十一
初めは香ふ鼻乃ろろ悪の

嵐が遠入る袋をりたを
強衣が汗み舞ふる佛の蓮
草もすくたもまをう海の花
ゆけは又すくたの塵の砂のこ
阿つたもくろや月の露の版
杉もまじき香を木末の蔭も
ゆけを以てく八月の月
初原を石破の小窓より見たり
中ねとのくくとくさのや
月夜うちが涙をまよとあらは
更とあらく色む白うき

帯襟

墨山

士朗

紀鳳

大阜

帯襟

岱青

士朗

紀鳳

岱青

墨山

あつた〜火のや〜いと狐の鳴き声
いつう花散るる湖の影
ちる花を足ふ由く人の袷を
かり花や〜りをむすふ藪の
夕言ふ赤電鐘の音のひき合
む〜く石のぬきむむ〜

大阜

帯襟

紀鳳

士朗

墨山

岱青

陽を小神を〜〜〜

長斎

かけろ〜〜〜

斗入

うけろ〜〜〜

卓池

陽矣や河旁清の松を此ひま
かけろくや松葉てぬくふ沖四
かけろくや馬の鼻つゝ半の尾
陽を帯えハ阿ふはう松砂の上
うけろくや人ふふのまゝの素

羅城

氷如

白圖

少汝

徐英

混雜品第八

松 石 蝶
物 栽
白 居

白居

物栽

わくわくの清水をこぼすふ社のまじり
もまなすくうちてんをそくくたより
もまなすくうちてんをそくくたより

青阿

剛子半日

はくま〜これ乃と半外に松皮
ゆふまやまちらを忍ぐも松の乾
木〜小極夢ハ松〜杖の水

于當

一之

唐水

山居

東ぬちや〜も松葉ふふのすま〜まじり
船新和指を〜むハ松皮ハ松皮

艸人

蛙聞

月見えくく夕々ほあつく常うふ
師の居るを思ふも思ハさる

書かぬや折る葉もあし
世ふか 世ふか 世ふか

屏空に風ふのそののうと

やうくくを舞くをぬとの月夜

まつて居新もる夕橋

ひまもりをわすれまやむの山

まの山あまのうきやんか

青月やあつ福せをる其の

若菜

之日月ハ巴々休家月来うえ

碎あまてやとあやうと

そあふより月ハうけをり居の

人あはの雪を降るむ戸の外

暑日や赤をほくむ蚊あま

秋風月み吹あり山あま

かりそめあまあまあま

中あまあまあまあま

洞里

雲帯

園曉

壺伯

若人

双鳥

其谷

蕉雨

雄淵

李臺

騏道

希言

菊溪

長翠

蘭二

素外

芸門

表世能冬川流能言尔なくは石
維子の夢月ハむら松小わらり

淡海道中

一日ハ風尔碎たりまゝに旅

風もすこし寒し二月の新男

病を重まのひらき標の壳

送人

松内能先おまをり松の風

灌園

橘中何よとらなき砂のよ

うらー橘ーゆるあそて林の愛

病能能報白方より夜ハぬ

二日刈若小二日のあそり

花をくきと新層尔みるを

嘗て能着海らるる一草目の花

鞍籠中豆之層能能おけし

山崎下りて能能能能能能能

穂芒能能能能能能能能能

漁舟小萩のよ尔アの中

そら風能能よくと能能能能

能能よふ日能能能能能能

まら能能能能能能能能能

可董 富田

沙漠

五明

株價

関更

野史

庭志

延至

五周

文左

垂竜

巢兆

如毛

仙布

岱室

柳涯

啓甫

大年

夕べの望みも書ふ能なり小夜砧
 思ひ出にこころの秋の夕ぐら
 晴くハ心くつ静くも静也
 月影よ秋の夕ぐらも静よ
 ありより鳴や小麻の花すき
 おもふ庭の夕ぐらも静よ
 二日んく心ゆもぬぐの毛
 きのおふりともも笑たりたのふ
 薄霞山沖めお身をゆりか
 木くくくの里こくたり山のこ
 ちむひりふもまを尖せハ秋の夜

松人 葛斎 西滴 多直 珉丈 春曉 其成 魚日 帶襟 昆明 蘭

夕べの望みも書ふ能なり小夜砧
 阿の寺小一夜をくりて

燈とも共新をともきて秋の月
 おほくこの人ハなあり秋の月
 味ゆ庭の浮世尋ん言ふお言
 山寺や春よりこハまはこく
 むりよりりえりうきうきとま

紀風 羅城 岳輅 少汝 士朗 岱青

寛政十年正月

撰者

岳輅 岱青

草枕集

学よらうとて尾張のふよ
仮寐とて日涉草記なり
時多き宮内殿乙卯の夏朝の
所や免の風よ吹ちるころ
なりくわ

あきの

素葉

修和の中山みさる

みさるを横をりふせる為
なとさハ啼き山をくまきす

我若の書を誦しき名ふ
墨煉る初と紙書を拾ふん

豆出月と思へ杖をさす
一本並ひ紙書をもるや

門建て外の花由く水の柱
ぬの障日冬来へつて来る

杓作る宵の念何ふ目を閉て

固く勤よ年をくむく

素襖

士朗

襖朗

襖朗

襖朗

襖朗

襖朗

朗

偏て阿ふ空ハ意しき鳩の意
获もすしきも月ハ小らうしき
摺子のつつの秋ふり根の根て
痺所つく根を挽 己る
ひくくと藤揚をもち朝日影
眉をゆめりふふほに 神花
穴一砂砂わきちらに 喜の字
逐きておしすこ 扇るし鳥
そつとくく 根を山登すし鳥
秋明くよすし 習ふふふ
村邊草の音子や袖ふたさゆ

葉朗、朗葉、朗葉、朗葉、朗葉、朗葉、朗葉

響田の舟の漕りりは初
這ふ響のあな面おき人々や
身よも取まぬ意を覚へて
抱の意又ふの風吹くりり
夢よ又砂る三日月の 一
猫ふえく摺し柳ハ夢をり
村の流所下総よ入る
大風の扇くくく又響く壁の響
衆の競のちくくくく
物まふ寂しき沙汰のゆめを
摘やはますや若菜のしき

葉朗、葉朗、葉朗、葉朗、葉朗、葉朗、葉朗

こまする可又花のやうなる
同し旅寐を伊勢の菓子賣
身の雪ふ遠きて見くもた
風の儿始末信 せうこれ

岐阜あき

物の毎消て長らふ世のむら
むらり引はる短衣あき 月
白雲ハてはひ女の神のまら
橋の雪ぬ来ハなかりり

山を指らすまの巻

山畠をうら人もお
續阿弥ハも袖言を引かきを
ぬくりくや出る冬のの 日
汐暮小神のやもあはるらん
何をくらももんぬ巻々巻
草履干はそあらゆるハの巻
あをれ摺りのわくる萩 系
人負小消る斗の月 照りそ
扇の中をたしをてり
大谷戸ふあ中山法閑寺
駒も頬白もあかりとくあき

朗 葉 朗

士朗

素葉

伴青

葉 朗

朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗

編張小肘く花の塵むり付
眼を志同る喜柿の糸系
岩小せく水のやうなる恋を
膝のゆくり小志何はく恋
ふせ等々をくくするを思ひん
杉もくろきまて事なきを菊
風呂者みりふの風雅をえちじ
露の寂蓮月の忠岑
落る齒を秋の名跡となるや
柿動くは移むりのあり
夕暮の星漆の塩焚城

青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗

尾をこらく笠奇の場
芒ちる衣小鉢買ふ使し
花とつ枇杷をくちてをりなり
今朝くく小笠を連れし人をもと
尾小交りて世よ川 瑞
むく雪は北斗形影をかへはく
ぬるき都の賦をき書てる
書ふ十日あすりの若かりて
このけりくする花のありき

青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗 青 葉 朗

修葺のやとら

月波平水鶴啼水の脈のこ
海よりみよははくく甚山
何うくくと一押は紅のを喰て
小麦の葉ををかつくむむ
幸あふぬ人の親子を足ても
水へ這出る産の造り不
ちつはけな猿も哀きを鳴やん
きえく又きつくと朝のとも火
ありくと夏の澳を押やうり

素葉

郁青

羅城

士朗

岳輅

紀鳳

白図

素葉

城素

岳輅

士朗

素外

物裁

白圖

紀鳳

羅城

素外

物裁

方明

少如

雲ををるるるるハ 抱りハ
秋の初時後の藤系居細く
みうんを喰へハひとり小をき
月の束ハ若の人も泣きたり
をうりくとと縋くくーら浪
若も初ぬ峰の煙りの手をて
加茂の社は多きうくくおは
四五尺の初花梅咲ふりり
土岐の山をかふる 結 賣
書を惜む人よをうくくはての
連糸の料は後る 業 船

四方山ハ高ハ孰色の空りて
あやましくありし関を尋る
中壁の白ひ小向ふ花もすう
小壁の風のりろくくよ
時としてハ水の香さるる
洞小うらる 卧 佛 の 貞
昨夏のきのよの興をトさぬ
踏上の泥も ころ 木林の花
とくく 影身鬼の招は啼鳥
手あよる人の 老 神 楽 東
は 村 中 なる 花の 風

延至 布泉 素檠 昆明 騏六 徐英 岳輅 五絡 羅城 士朗 信推

辰巳坊 中りるく 元中り

同 芸月

坊二句ハワケ 玄雅 近々 伊勢
よりうての 儼分の 主いふれ やと
懐よーき 枇杷園 又 拍某を
ついでありし ろくく 花の 聯句
よそ ちへぬ

山涼き 伊勢の 依家 小文を やり
不やして 足る 臺の 小 貞
ちりや 花ふり ちりと 日の ちり
舟の 帆を ちり 出れ ちり

霍州 紀鳳 白罔 騏六

飛と竹や理

雪の梅は雪の日やみづの月

士朗

やまのその谷ふ田あ人の表

青川

雪きゆり窓の雪籠のうき初て

方明

なほと絶てやう急のあらのそ

盛青

石井の雪の芥まされひくろ

羅城

氷やうりまらるるくくれのうき

竹有

かきゆのうきは二母の古寺福ちう

少汝

おぼろせまのうき縁を塔ーき

岳輅

又きても人の見さうる初て

天老

のまはあまのこころを
橋をたぬ女と雲はうりあは
たるとあまをのほの魂 棚
くさす 鳴きあまの月代な
久米路のけしと埤もまむ
凡ゆけハ洲や人の髪うり
花りのれを戴き
穀垣を花のまゆと成り
葉をまねの志川く姐の 露
八守と辰十の湯壺はうれせ

松兄 川朗 青明 有城 格汝 兄

徐英

るは鶴おけふくとあくなり
お音のすくくはまの森の 神
板尾を何をやねと杉あま
田や一の富をまきく神と素
福ちけまきつねひつを杉あま
らかりはくまきつねひつを杉あま
ねまふあまみねあまをまきく
琴のゆふと終はあま
月うけの蒼子あま朝あま
念佛をまきつねむ山あま
あまくと橋をたぬとあま

青朗 川朗 青明 美青 朗明 川朗 明

江徳利を磨く志々砂
帯の交れ口連交致格より
ゆえる前のはのほめまじ
思をうりの関登子口書る毒の毒
答るうきる日の見ゆる松山

青 明 川 老 兄

士朗 五、 少汝 二、

青川 五、 岳格 二、

方明 五、 天老 三、

岱青 五、 松兄 三、

答はけりすりくろ

答はけりすりくろ

十七歌

答

答あふらつるあ〜〜

答の鳴遠ひあ〜〜

答は語うり〜〜

答

答付の身てちる格は月書

う光う〜〜

少 汝
方 明
全

青 川
天 老

小雀の海をり新く梅の忌

春月

もるの月あらしも出たり遠
むつりき東のあらしは春の
玉のくもるこれハ春の月

春風

怪り人おもぬよまろの風
春風の吹くは吹たり
渙文好く入るかり思春の風

花

春の月もあらしも出たり遠
ちる花のみを西りの泪うか

柳

氣晴しくハ春の春の柳
月はあしき柳と成るなり

春の月

春の月よん春をくぬ
わくは春の春ハあけ母一丘の家

全

羅城

岱青

全

大車

青川

全

少汝

全

天老

桂五

全

青川

岱青

全

尾馬

何れも海を渡りてしを帰る
夕月を月とてしを遊ばし
あたる夜を下る車は志より竟

青川

竹有

全

雛子

世をゆけいふうらむと鳴雛子の歌
をれはさるふれ陰よりきりの音
松低きゆとりきりの夜明る

岳路

大阜

全

えらるぬ

夢の余はなぬる啼りか
えらるぬのちあはれはなぬるぬる

方明

羅城

塙

縁の平野とやせはつらぬり塙うか
湖へかゝる馬うけをなくあつら
魚こくと塙のふらる夕

青川

岳路

全

苜蓿花

菴の苜蓿や二日摘みは花は咲
そはつきの花はふらふらとあはく

桂五

一勾井は金ひ穀をこす

苜蓿の花はよとえんすらの標ころも

士朗

うくつひたれとも親むくははさる

けきてもんえんし子雀とやまよ

あつらえく

芝居の初は必爾海く啼一雀

喜木秋

夢の初や同一夢は夢の
夢の初やあけもをさき月
夢の初をさしひは惚きし物

物真

あけりふの舟を引きき 芝居うか
物真やちの鼻つゝ中の 尻
物真は座の浮土免くれり

全

青川

松兄

全

竹有

白圖

全

田螺鳴氷のとき大徳寺

椿堂

花音のうけや回しもよみききて

右明

あつらえくの夢をさしひは惚きし物

少汝

歎冬

山吹の一瀬ハ水の何く

岱青

一ささの山吹はるぬ 朝月お

徐英

やまのあきをを離れし 松の何く

全

あつらえく

川まきよみきききて 松の何く

松兄

たぐりよみきききて 松の何く

士明

山の井は海く 春の金枝

全

己未 書

菴犬集卷之一

歌仙行

枯くや世也小出向ふ菴子大
 如子やくそくの音よりふりり
 火桶張人の棧場を足て居りて
 夕くら里くくと立なうく新日
 橋の木のちりりの三日の月
 常子ねちるうはさのくう人
 湖の水を一つ挽とりふ至り
 垣の際まもるう寝持く歩れ
 世の中を羨慕よあつる今朝の玉

士朗 野雀 大蕪 五道 左雀 石老 湖風 士朗 野雀

鴉ハ秋の鳥てこぞ河

大蘇

小言いふやうふきこゝる賜の言

五道

若き妻ぬまはるまはぬ山畑ハな

左雀

襖よきし聲を月夜小逢あり

士朗

たきううううういふ視入る女

湖風

はまつとももはるまはる古袋

石老

砂川まゝかきぬの細うら

野雀

横尔ふ花はいつものゆくゆく

大蘇

鴨塚の鮮のなまはるまはる

五道

みーくくくくくくくくくく

左雀

まよひまよひまよひまよひ

士朗

一七七

おそひてしききききき波山

湖風

早瀬お舟お舟ハゆききりやむ

石老

人毎尔謀お草を控白なり

野雀

何をあろふ花ほほほほ

大蘇

漁くさお鳥帽お細をたて

五道

あつ凡雨くゆいふおお

左雀

ちらくと音の帯る波の上

石老

阿らふ恋すお三井お結

湖風

月赤き軍お中おたつお

大蘇

根深お味の出まはる秋う

野雀

嬉々の高うるまの芒み

士朗

板戸のこころふ家のをく〜
 賢そ〜ぬ人りと坐尔思ひあり
 をり〜児の直す 葉 昔
 善う長夜をうしむ中より鳴る煙
 ねほ語不明る二十 八日

五道
 左雀
 石光
 湖風
 大蘇

枕七歌四十一

菴犬集卷之二

百韻

松言〜芒尔明雨を名〜
 小庵をさ稽の子そ〜十月
 蜜の子孫ひとり起るる曙尔
 酒う帯〜と〜杉の葉を〜
 腰〜け尔なり初と山を赤うきて
 真葛の糸を〜海を〜
 蟬多〜つ〜二日の月の家
 角力の虎阿法静あり〜
 ちらり〜と船漕よ〜程波澄

野雀
 松元
 魚坐
 岳輅
 士朗
 蘭屋
 桂五
 梅間
 羅城

めくろく雪の元る年 時すぎ
 根の末ハおもたきもくり替りて
 鳥をにくむ寺の飯 食糞
 甚おめと双ふうちと二人ふん
 みろくくとと雪やもるけすの
 魚乃つく半の魚くも水うきて
 大くけの並み橋西のまき 京
 月元よと河くまうあふり 山の土
 層うきととて夏うをせまら出す
 とやくと焼らあゆふ窓の家
 うろくまお眉のまきゆの梅りま

葛井
 嵐堂
 天老
 少汝
 大阜
 方明
 野雀
 杉兄
 魚堂
 岳輜
 士朗

七
 七
 四
 上
 冊
 三

村魚多き垂釣の事と答むくは
 ままこのふるき油生ありくは
 疎人尔鳥賊の鯨を未立立て
 郭の下のりそふけー板
 答いゆくく落の雀のさりとて
 うまぬんくくかん色る 神妙表
 隣撞て蝦夷の候をちるこ
 いはほふ結ふく南書ゆふ
 雪夏ゆのちり尔毒の吸出ゆ
 活の河やまんのかち教なり
 あふくまふくふくくく誰かき

菅屋
 桂五
 梅間
 羅城
 葛井
 嵐堂
 天老
 少汝
 大阜
 方明
 五雄

箕子家の家を並ふむろ戸
 種會をぬのふたと筆ふりり
 こよなきをろ小月々ちらつり
 小社をむむ中ほひも秋はうら
 桜をうさ落て鴛鴦を 烟
 芦う巻て萩も落も何らへしを
 一時はくも門たぐくま
 土山をききのふハツをたものれ
 液輿の尻のくくき 杉 明
 本とくきんかたて作を寄る
 葉おつろくの志を智て出ん

左雀
 五道
 大蕨
 石老
 湖風
 霜居
 竹有
 士朗
 東水
 左雀
 五雄

此七於四上四

五雲を鳥の辰の申のあを
 花をみたるををむまを
 丸う吹くむ葉のまう
 浮まみても名は賓取盧の耳の空
 何あう三井極み一いつく
 是後の子相尔笛を吹も
 尾のとの杖をきうはあう
 動くくやう橋う人の田みりて
 管もやさき橋井の里
 胡桃焼て移をとの袂海ふく

大蕨
 五道
 湖風
 石老
 竹有
 霜居
 東水
 士朗
 桂五
 岳輅
 魚堂

垣根まで禁ち宿の妻の衣
 月教尔急の指をねり
 法師のまゝ維子の一
 係元のむり落たつ壁力元
 幼くもき度ふと美ひす
 五月面も端うて甲斐なき桂笠
 百合尔よとこくを雲舟りう社
 目赤はつる程ふ小者のむきてり
 浪うりも星崎のふり
 ちよ布くも壁端電をゆえ
 親南り子ありもの云よき

馬士歌四十六

椿坐 大阜 桂五 松兄 少汝 椿堂 羅城 桂五 蘭屋 士朗 全

馬士ふむり一板を巻てる
 折戸をひらく水仙の月
 日新なる布留所宮左の本指
 ののわまをさすふ谷川の音
 法師の弟尔栗白の 名を去て
 山葵小むる之文の 為
 鬼舟出る煤の鳴も止尔く
 石つ阿くく一吹水五月の末
 采衣多身羽の阿なりふうたそ
 游女所寐言渡りそくり
 はつり親妻の阿たの阿りさまや

蒙産 魚堂 梅間 士朗 天老 松兄 魚堂 天元 羅城 方明 大阜

以中の塵ふ文の 備 多 英
くふあしを山樞草の麓
瓢を提く来ぬ人もを

岳輅
少汝
棟間

菴犬集卷之二

春

我朝ハ五ノ樞の本跡写外
やうーさふ必書り子と提ひり
人の事くくわもようぬ菴の忌
松人尔おとろりさむを花アハ

士朗
魚堂
羅城
卓池

よりー理山ある

忠臣くりと命をけむ樞外
藤をさむのうらつく忌の山路外
うさくからあやり山南りの之外
山乃之ら面ふまきやとあふり

少汝
大阜
野雀
五道

花の山を高く見つけた
ちるハ風もすハふよ人々
花見ハハハと視ゆるは

花下飲

くふ〜ぬ方尔来年の月と云
大堰川うつろを花尔曾ふ〜
花の上ハ花あり月の阿〜山
くまて〜そふよ花は月の新
花咲〜程〜松の齡〜か
一子をま〜つ〜

〜とりまハ阿はのふる便〜

左雀

全

野秀

名人

月居

龜梁

湖風

華涯

宇洋

地七次四廿八

花の山〜海を造すれ
吾はくら〜居る 巖等の小春ハ
芦の登ハ鄰々〜りも花をり
呼續の淡小人〜落〜

小春のうるる腹ふ〜

郊外小吹〜

〜は〜〜〜花のふと〜
花の花の共〜つり〜る
たのふ小半〜はる〜
菜花のふ小〜はる〜
菜のふの阿〜ハ〜

砂文

蒼則

千當

世牛

菜産

木容

雨来

毒松

巨樹

む月六日の夕られは松村と
いふをくをまねぬ松の生垣引
をりたるまゝふこのもき菴
ありて月月のあふとゆるき
してやくくききききききき
世つとをまふあうらうん月と梅
る中ふのやりて

士朗

大仙の飯を足ふりまきききか
うくひすの勢きききききき
ききききききききききき
梅はふりきききききき

全
真兼
五喬

梅

此七歌四三三九

ききききききききききき
うくひすの中の時来や木山

大蘇
五来

梅うきききき

風のくききききききき

吹かきききき

鷲の折戸ふきききききき
うくひすやうくひすききき
ききききききききききき
ききききききききききき
ききききききききききき
ききききききききききき

由登
雲帯
天志
乙二
石志
可考

夢の日の日きをりあつて春の月
 序里やも秋の月さけ葉鹿
 たるの月ぬりまのわきし
 さむくさハキく春風のささうき
 花さるる好いくまてたるの風
 春風や世のゆえハ隅四川
 六条の津堂やまきひるりぬ
 辻佛の西作はハ花のまき
 小形ふりあつく月のさしあるか
 こころのつらうあ方の花散を
 夏ふりつてあふ人を化登り

世七次四上四十一

兔門
 目紫
 方明
 桂五
 文左
 湖風

たもふらふの修善を録み
 春の月ぬりまのわきし
 さむくさハキく春風のささうき
 花さるる好いくまてたるの風
 春風や世のゆえハ隅四川
 六条の津堂やまきひるりぬ
 辻佛の西作はハ花のまき
 小形ふりあつく月のさしあるか
 こころのつらうあ方の花散を
 夏ふりつてあふ人を化登り

岳輅
 春蟻
 佳長
 圃曉
 石老
 野雀
 尺艾
 大蘇

山里や木海をくちききまの言
きし鳴るやふかしの煙ハ言く後

五雄
栗大

ちりよの淡小

をくちりほきてて何や一規
をくちりほきてて

紅袖もなごて雛子唱やくりが
後ひとらほなご雛子唱麓川
蚕のふきうらの幸あり猫の悲

霜居
秋國
希言

夢想

松風ハ名をくちけむよまの菴
かく書て人小あえり色ハ

野雀

七
四
五
上

もとよりの月ハ色く 影 色

と人の泣くことと

おほえきくまきさめぬ

其の言車向くを 影 色
り春をとくく起ふ夕一外
ゆきまの氣を色に海は小笠
ゆきまを色くく起ふ夕一外
まき柳のまきくも影かく小
まき柳 小朝露の輝く影かく
いつあてり柳をくく備くく
大空のまき小まきまぬ柳くか

九峯
魯隱
左雀
魯堂
黄山
雄洲
周瑞
芳之

新人の物と少む夏の杵うりよ
 松先まき〜こせう〜坪原の妻
 月うと〜みそ〜梅の本の石が
 之日月のあ〜も白〜梅の玉
 山里の人〜そよ〜梅の花
 人のまゝ〜と〜梅さ〜中井
 白梅の七枝さ〜う〜月夜
 梅を〜ぬ人〜あ〜と梅の玉
 笠寺あ〜

松兄
 椿堂
 雅巳
 野雀
 嵐堂
 葛井
 許凡
 大蘇
 梅間
 少汰

枕七拾四上三二

菴犬集卷之四

月ハは〜〜〜回りよあり 郭一公
 葛城や表明て足角の 郭一公
 嶺 五五〜若葉屋〜あめ杜宇
 本と〜おは〜〜とあ〜ハ夏の〜
 不也帰四月八日多〜まのふ〜
 月小あ〜〜ハ〜つ〜本〜、寺

騏六
 野雀
 桂五
 嵐外
 孔阜
 硯静

信徳の寧岡々菴を白神所
 冥と名つ〜〜お〜るまき詠念を

色西にこそさうーらふ門 孫

けーらふ書つく

冥古を誰をくつへハをとき
ほくきん劫波の種ハ人しつく
ゆけハきしとら砂ふもそ免を部
奇里の神よはよをく知れ
年のふハおつくをさふ必序
詠人の望見をく唱りやとよは
杜鰲あつゝをさ鳥の世界うか
鶴の舞夢出は竹の座うか
忍り事くをさハ又西く指あ

羅城

左雀

吐牛

魚堂

加津

文杉

大阜

壺伯

莫二

柳七於四上里

季よりのゆき指はうひちり
傘のちるふ出くり夏の月
り若尔人のちるあり夏の月
をさくを月小種きあきり電
ま、風よくとくくくくくく
松うけを掃ハ涼き風くく
月も日もすくき松の林外
季本とくふ影み
まのちとありを涼きをさ
涼きを松尔出く唱雀うか

李閑

卓池

里祐

窓巴

大蘇

葛井

梅間

蕉雨

中

西平鈴川あ

かくてくたせハ涼くくせり終川
中くさや月を見送り草の上
ひよくと鶴いそくちぬ五月西
五月西うや老ハ屋振あり鳥外
白鷺の山小そひり阜月小
春西花五月雨のとく羊の麓
新あはる松飛ちうふ草くか
段なぐや松のひをりハ小石川
わけやまきく夜をり林の向ひか
あ鶏々と鹿西りたる麓か
人の草くち枝うこくはさる草か

野雀
全
岳輅
士朗
景山
可都里
武陵
存古
竹有
石老
左琴

枕七於四十四

年月花け一免まら老山の
ふととををる

うくひさむ老をまの目とく

あふ坂山

左雀

いほきく水の出て暮る麓う
若き目やをさく松ふ星の砂
十日るて十日ふうひぬまを
白面のそきり松のあや砂外
二日月もも色とふ松う山田小
そとくく小鶴も草くちう田松外
夕雲うあくハ山崎ノ末古名

方明
松兄
青川
天老
雲岡
椿堂
蘭屋

ふんく 蔭色ハく 月のうきつり
松風を先きく 里の清水うか
旅くのゆやをく色ハみ沸く
ゆきくき 園扇持たり 夢能

壁雀亭

兔角をく 夕日ふひくく 月
咲きく 月ふくむく のふさ
うきく 月ふくく 月
をく 月ハニ 月ふりぬ 月

喜年

素稜

全

文兆

五道

五明

士朗

関豊

庵犬集巻之五

一 祝世於四上南五

初月や布くよく 華ふ山の頭
之日月の果尔尼西の山家外
月ま北月小ほのえく 小お外
全の月移ふまむと 鳴 鳥
まふ人もく 月とも 移る 全の月
月阿まハ 表ま阿まハ 月あ外
さゆの の名もあつきく 月の月
ゆきく や 声のまをあふ 月の月
己阿ハ 切く 掛らん 月の月

吐文

岷山

壁雀

全

石老

桂五

椿堂

〇く

蛙聞

さく竹くふきなき月の庵うか
 未亦月夜と有りてくふの月
 高かほきて山のぼつきふく月
 山も藤も月をみりて移の月
 杉柏月ハ先んるそ増りく月
 存里や雲ハ来りて雲の月
 焼つくはまては雲の九月うか
 福もも雲もも雲の月ハ漏り老
 浪平の月ハこの秋とこり阿も
 十六車
 あまやその雲とて月ハ出尔竟

湖底 仙市 石老 斗入 五道 巨鶴 六車 李堂 蝸園 大阜

北七拾四上中六

蛙岡亭あり

お亭の晴日の扉一さきと雲の空
 日のくまら新ら芒のよのきうか
 善林はくらの雲葉
 又むとー せ

士朗 大蘇

興ふまひへて

あやまきほくくくの雲葉ふけ
 世兼寺あり

方明

世兼ちハそよと雲へ秋の風
 杜風のうらまをたり雲のこあ
 杜風ふ山の物はほけ小家うか

羅城 一之 素繁

秋とくさけハも和杜風のこねの松

加味

松葉正杖葉う顔響

而とさくらふ山のたまり秋の風

五雄

あき風や伊ふつたも山鳥

燕武

末光の耳ふほりる和杖の風

白ト

杉葉のきくふ流る月書

八峯

む美入圖

萩葉ハ月名もあのはりひるか

魚堂

月の出るまで、萩葉を葉うか

大蕪

迷懐

萩とく地産も流るおもひる

蕉雨

此七の甲上四七

音くハ月もるをり萩とく地

斗睡

刈むくふ方より萩の葉すこ

大魯

厚う萩ふくもあをり萩葉の

騏道

略三や海とせんもなき松の葉

其静

矢田の種あき

草竜

鳴きく萩をく月ハゆふり

應訂

鹿鳴くちり萩とくまき中毛

大蘇

扱ふ

吹すく風の中より枯るか

少汝

五道

あのころの面や月中も砧ふも
 杉を分んくまき長たきはなきの秋
 細林やまきまき沸きき機のは
 ちりり長八仏も指毒を細の杖
 天の川紀の涼まきさふりり
 まりり火や物や〜ヤトを〜
 〜〜ぬまも又面や〜杉の露
 果を〜の帰ふも引鳴子
 ときき何け〜葉の本も残る暗
 松風尔あ〜り付たる袖も雪
 ま〜るる美葉のまの夕〜南

阿彦
 桂五
 松兄
 柳莊
 士朗
 石老
 文淵
 卓池
 左雀
 栗山
 升六

一七七於四〇四六

朝うむも日とふさる暮序お戸

道彦

醒う井をさる付節新うち
 之り〜る〜り落たりあハ
 いくみよさるの人や〜馬士不
 ちり〜まき〜

醒う井の葉ふおあむ驚う南
 立葉ふ松の上あも秋の葉
 秋の葉ふ百〜漢の埃うか
 ち〜葉や葉ま〜い〜ぬ葉家
 葉の葉や花ま〜捨る豆の売

東水
 帯楳
 宇曲
 蘭厓
 岳輅

田家

秋の目も縄を縄する藤のうへ

榎間

庵犬集卷之六

冬

くく麻阿々々々言揮筆名外
打出候尔より秘考くくろ
くくく言も橙まよ人の門
初君や人のくまたるひのまはま
はつちやや澤山のまハアアアより
くふハアアア言くく風う言ふや
今の子竹の雪ゆきのさく美か
かくて阿くハ阿はも又アア言の義
言様くをう記小家くく外

岳輅

方明

士朗

米彦

天
城
女

大蘇

蛙開

野雀

祝七次四上四十九

末う〜〜新竹不落こむ雀うか
 風のう〜〜由く葉登うか
 本う〜〜の雲の二まやまの月
 末う〜〜の藪ふ百舌多々名外
 一を控まハ兼も亦安〜
 末う〜〜能四方尔何る極うか
 月年〜〜竹の梅ふ鳴〜
 宵〜〜能浪を何〜
 夜泊
 松ふ〜〜所〜
 山〜〜人ふも〜

五道
 里桐
 了國
 雨節
 大阜
 左雀
 天老
 木容
 雨曉

見七の四五上

水也や立河うり〜
 月亦亦ま〜
 此亦出〜
 引〜
 客舎
 傾城ハ位り〜
 人の子のあなハ〜

五道
 梁臺
 有磯
 李園
 樗堂
 竹卧
 士朗
 岷屋
 巨峰

松鶴の鳴也師まの二市の井
り多のあそりともをぬ山あふ
多をむむ亦も一日の磨う分
煤拂を世活ふて鳴る鳥うか
士朗
山阜
蘭屋

享和三爽年

野雀
五道同輯
大蘇

藁つと集

自序

代かく小田抄けし先を利
子苗とる日乃夏のおとま
田のそよくあしをくま
香のさるくと報する秋の
里ぐきむさふりそふを以め
ふくむ多くこの年一序を以
一事は拾ひらるるつと十年
近く有りてはふ生涯のつとを
物しあらうしむるふまひと

修りたまはむを色に結ぶ
ひをの語りとあつらんよを
計り

福田舎

文化七庚午仲秋

弦六

自叙

枕七次四下

歌仙行

月よ老の横るいをやとふの言
葉の花まおの影のかこ 隅
新(舊)の理をこゝ維を討ま
とりのちあある枯のいろをか
菴僧をを青八月の袖めをり
あうきりハかこくあはこ
杉風の夜やのめく志やうら
い川やうて生る小物女必物
山寺此屋の物基よりち眠り

白隠

駒六

士朗

ト

六

朗

ト

六

朗

ぬりありれハ胡麻の花ある
 板ほるちを折くハ寝られそ
 只ふむるよの意をすもこ
 八月八月舟ききてもほめをや
 峰よまをかく新のいあつま
 きをしく寸尾出芳の社をお扱
 ありむすふさか後をうきま
 必一結サ新一結生をひき連
 務のりやうなま氣をりや
 温槃會の種つく人も何仏
 務のありれを居風呂へとも

卜 六 朗 岳 六 朗 六 朗 六 格 六 朗 六 格

七教四下二

甲子の年又吉地を足て慶り
 山やしく起守報りや 唱
 筍ハ垣の外より先へ出る
 ちちちやう深き一し子不整
 世の中ちるよ又巻われや屋白
 かうくふむせる初志何うあり
 いつのるよ序ふ成たるむむ
 三笠の里へ麻子下や 了
 ぶく酒先をとり来よ又来よ
 奇きくくこのくたよりなりをハ
 梅り善ハ風の吹きも射てゆく

朗 格 六 朗 六 格 六 朗 六 格 六 朗 六 格

彦原のねく子房新く戸りて
夕暮ハ興の才も唱かを付
竹の幸多きをもちりも妙身
むらゝるも花の根ねふ根文と波
津もうゝすもねよやくる

六 朗 終 六 朗

白圖 四 駢 六十二
士朗 士 岳 輅 八

冬之部

雪を雪やまゝ 曉の雪平の松
此白化るもりよあのを仰
かふ茅もやまゝ 毛衣の襟ハ良くそ
さゝかゝめと云出さるハ 旗六
出来たりと云々 今
むらゝるなりぬ

曉臺

曙やあゝハ 君小煙もれも
きのふん すすもあゝハ 松尾忌
松若や彦の美 白髪あゝ

士朗 鹿野 岳輅

祝士終四下三

十月の函やうれぬの初あきく
海士の家のあきく穴あきけ縁の皮
印とらぬかぬのふも松建うき

駒六
湖風
阿城

生涯五十年ハ着のこくとく
ふぬ百多ハ字連のこくとくあはははは
城ハあきぬのむうくとく今ハは
名古屋ハ引揚させぬひその
阿とらぬ者たる初あきけりあひて
今ハあきぬをうきうくとくすりぬ

枕七の目下五

蒼くくとく唱中流源の川あきぬ
燦と手とあきぬ縁はあきぬのこくとく
かきくとくとあきぬつむ冬の内つへは
傍くとくと人の集はるあきぬあ

駒六
元美
駒上
大阜

老傭

名不ハおもひ縁たり居の月
灰とむくあきうくとく折風

駒六
士朗

居の亭うさうりちこの里あま
 的場ちゆうさうさけり
 曙の毛櫛ゆうさるらん
 あうつらう流れせうり
 坊うひま留まるとるさく
 西の秀句を傘下 書
 面白う伊勢の料理を取継て
 赤糸の袂立のまてぬ 山 石
 むら雀ものうき影子喰つら
 花をさきおてよその沙汰する
 名月子おらうさる基所

卧央 五雄 竹有 方明 大阜 六 朗央 雄有 明

七下六

芳野あうに油の角力取
 者の置をそらう遠う控
 人のそれる花のまをけり
 案一さを争うまを善一う
 雛の居所は娘とる 嵐
 おうこの名引は付り
 涙は消ら影の流さ
 うせ舟の舟の鬘をまゝ
 琴のひと子と一の音障
 寄てと浪の花表あま
 酒あやうさる苔のうひら

阜六 朗央 有六 岳格 朗央 六有

け角やとり巻よついであましくなり
 そのを答よする人よまきこら
 星まらる花ハまら所きねの風
 さふまもせぬ涙つやの 月
 甕つきて小をさしとヤロくよ
 波屋の程うある志くきく
 八重津を流よあらる猫の鈴
 窓のほそを免よ足白を川 急
 帰す其の水を一枚祝をうそ
 むりかきよま裏の 山 也
 咲花の余をそのを流をたり

裕 阜 六 朗 央 裕 有 六 朗 央 裕

沙路をさるふ風ゆきれそり

有

騏六七 士朗 六 卧央 六
 五雄二 竹有 六 方明 二
 大阜三 岳輅 四

秋之部

西の月歩りくそ花ハも花ハ

竹有

きくの花を掃たぬ神の瀧らけき
 之を一時のわづら麻の鳴死人
 横雲の杉山崎の麻のこゝろ
 その原やふとハ何を唱小麻
 風ささしくををたか山の麻の香
 破うてハ嵐のわづら くの車
 人ささくはをきき事なりはふの月
 事とくハいつかそとわづらふの月
 花すくきとわづらハ月の空あう南
 秋すくきとわづらハ月の空あう南
 帷帳のきくわづらとわづら

麥阿 秋丸 墨山 硯静 駿六 五雄 帶梅 駿六 竹趣 士朗 梅洲

手くくの花を掃たぬ神の瀧らけき
 之を一時のわづら麻の鳴死人
 横雲の杉山崎の麻のこゝろ
 その原やふとハ何を唱小麻
 風ささしくををたか山の麻の香
 破うてハ嵐のわづら くの車
 人ささくはをきき事なりはふの月
 事とくハいつかそとわづらふの月
 花すくきとわづらハ月の空あう南
 秋すくきとわづらハ月の空あう南
 帷帳のきくわづらとわづら

葛齋 野秀 鹿野 駿上 彭朔 烏丸 徐英 駿六 卓老 岳輅

勢州菩提山萱堂二夜三日参籠之時

さく向ふ併れ外ハ秋の 馬

秋の草ハをせうくそわハ月夜

名原や水はをききする休の 久矣

明月の如くうつろふをよめる

桂五

病後

そあつちを月ととりつゝ歩み

駢六

上届り世せしれり部介此

月をよみて夜ハあまたをえり

そりりあり

月丸くわき流れてせよ丁の妻

美く代りさる砂の粒よりふの月

射道

秋の萩ハ只似ゆはよあやや

由肆

秋の萩の是事志くふ空の月

卧央

月の出を望みく居るすき

珉屋

九

九月至日竹生鳴よま

風のうらあゝとて日の暮る計

月空陰は富る湖面月うら

まて雞犬人語の響を懸す

自塵を吐たるとあつちせ

湖を指小志くり竹生鳴

駢六

いるまあり果ち落来るひえの雲

兆雲

目をこゝあす時稀妻の甲を

駢六

あつち秋の月を望みとて詠

素剛

蘇山よ登る中一五十年其又

今逢ふ月の末三岳の像を

終りなりて

みんとせの杉和竹のつ方をちりき

駿六

あふくもあうう之岳の月

大阜

石海も蒼海系は風路

五雄

夏之部

衣ぬれはもろきもよも衣

榎五

いふくそい父のまのまんま衣

士朗

おやうくこい子小懐りりこあもく

駿六

衣と見し花の根根を故きり

而后

除鞆をこまも故鞆を家よき

少汝

手此とくく所もて来ていり

尼開樹

極るすくす杉のことと夕すくみ

浦且

榮良やかまうりたる油檜

九岳

夕うの毛のあうり此料理

駿六

時鳥一椀の茶を投やま

大阜

やとま守唱ぬうもうう月暮

木容

月をほひて廻りそのめや時音

駿六

やとまは吳越のまううとけあけり

竹有

鳴うつて健くう鳴やむ除鞆

岳路

まとももまのあもさよけいの毛

田江

牡丹咲く俄よ毛を起り

松呂

うし掃くこやうそお月のあけ

鹿野

さうさふたのてし日こなり苔の花
夏の日 思ひぬくこよ明よりり
夏の日 思ひぬくこよ明よりり
夏の日 思ひぬくこよ明よりり
山は痛て起きたるもすき嵐
水鶏鳴泣をよむ守細江に
夕暮也 湖の氷引かこき
夕暮の果おもしろや水のう
第やと朝ハをう仰う背をこるぬ
隣りう 灯うらるる若葉うか

駒六

米汁

駕風

五雄

楳間

松菊

駒六

昆明

也人

萬中

駒上

枕下下十一

遠くよさハつてをいふ
さの敷のこの手栞よとすりたり

春之部

梅の花た〜き玉の塚うれ
山雲ハせをまきこのや梅の巻
夕横蛙と〜て鳴を〜り
きのふえ〜梅ハむの木の苗
ハを〜花忘れれる宿も〜り
花毎〜も〜り八重梅
裏風の井子新〜す雀の角
さ〜れ〜る〜る〜る雀の

東雨

駒六

岳路

駒六

大阜

黄山

圃曉

梅間

徐美

金谷

うらりと出たり下はあひはえ
花はつるものとも出る山家
花を思ふ事人をもる山家
大寺もかういふさう花のこれ
静さむ世を志す梅の花の喜
このことすきくも面白きもの風
喜の風廻つり来る境うか
喜風やなれ出る田螺か
やふへいふ事もするよ喜の風
さよよの良むつりや喜の風
きこえよき人の姿や月

永齊 少汝 駿六 方明 駿六 竹有 茂竜 茂東 月底 李臺 五道

北土抄四下十二

教寺や海士の上る涅槃像
山寺や入佛供事出居る
本嵐ハ杉のうさよ唱りし
輪うの事子も出たり鶴の表

士朗 南巢 沙鷗 有磯

人麿讚

初桜のさくははる山色
何某新婚の賀よ

駿六

喜の目はつり金も
喜の白くや教又るの如く
喜小二日ありは日き

竹堂 大商

荒海や去りし春まき草の魚
桂五
りまを踏波の草子見知しり
彫蕪

諸國四季部

梅咲や春くふへる響り穴
七椿堂
駿六

さき日のあはれをさけ草の梅
駿六

見くらゝき旅の途やまきの面
三六
卓池
駿六

二月降く草中毎のあつらふ
大津
駿道
駿六

二月やうはくあやう人の衣
駿六

色のおもふ物を二月の嵐は
六華
一州
駿六

才ひとらふや因螺の蓋を時の草
箕栗居

梅柳まきの因鼻と又雪をやり

梅柳まきの因鼻と又雪をやり
駿六

花のまねは似たり草まきの時鳥
京
其成
駿六

うらうらうと笑斗はほくきす
駿六

あすはあまのまを笑うを附草
一七
雀鳴
駿六

二月月又序相やりやあつらふ
駿六

との花のまねはももをはあまを
大坂
長齊
駿六

花は水月影まてあのかつら山
駿六

月の出て目を映接のまゆらう
駿六

すくえれは月やと響る色の月
駿六

をう響は流れかやあやまの川
駿六

七夕の果は稲妻あはなりなり
駿六

駿六

秀唐を住よかりりり其の力

大坂 岩若

夜の月あもなき心あそよけれ

大坂 駿六

ちとのつらも其の情すき守ふの歌

大坂 米彦

月よ嘆きもあなくよ木のうけ

江戸 駿六

とやくと種もりのきなり田一枚

江戸 駿六

田を種まきくふに潤り守うこうをい

イセ 駿六

予ももふり見ても穴はる清水をか

イセ 駿六

可きも予もよませて出たるを種もみ

大坂 駿六

まゐる物のすきと其のまゐる

大坂 瑞馬

炭竈のうへは清りり其のすく

方 駿六

朝志力や焚あつゝなる飯のよ

方 柳庄

此は抄下四

鴨鳴るるの形の夕のくさふり

駿六

稚のそれ屋ささし形や後の月

近江 砂文

出るり月まはる松のよきあきの月

駿六

二見の浦よて

名月の出汐や沖のよまきあち

千阿

月の糸ハ強よまきなり二見の浦

駿六

まき星のあつゝさぬよきなりなり

甲州 可都里

粟飯の森よまき

森のよきや星の二粒もあつゝらん

駿六

丁もつち松のうへに山かすこころを

大坂 井六

いつゆるとくなく層ハ深なり

駿六

とつ若の毎日津や諏訪の湖 竹齋

赤鷹の志や二北三尾浪富士 駿六

淡雪又雪を暮あけくすりも 秀媛貞

昔又涉田を歩む鷹うれ 駿六

人等う時を等う等うめ 桃林

為晴く松も乾くぬくれ 駿六

入やすき月ハ若葉又かゝる 成美

朝風や若葉を似く山の形 駿六

引霧を杉葉さしけり鴨の穴 香檗堂

葦又少かけて鴨やの住居外 駿六

極るとハ年暮のゆき 善福 正平大節

七次下下主

すくまるとつよい雪とりて梅の花 駿六

と彩りと折り梅の整ひ小 名語溪

懇懇人をするや梅の花 駿六

持て来ると余にけり冬あより 五来

冬は誇人の喜きく人とけり 駿六

梅来ぬと波さしけり石壁は誇 秋奉

秋風とそりく吹込赤葉は 駿六

孫ぬきて梅は風きく味うま 成呂

洞の梅見せし、と食の癖取れ 駿六

赤鷹ハ芒も極まり梅のうれ 喜年

是もと小日ハ入より芒京 駿六

鶯小梅をきき岩のすきすき

三毛のやと鶯のききぬききすき

鴨中一羽とつらみの隙をゆく

幅幅や芥をりゆく下河原

出羽の月らん山とふ西子若りて

原風の生を雨の月の山

雲のまを孫をえりり鶯の月

よーやせハハふふ西を花の宿

花さうり今を争競る人の歌

さうらう笑ふあより啼きとひ鳥

ふをやあすハ踏へき山さうら

鶯六

琴州

駿六

近江 芳之

駿六

京 大左

平松 亞漢

駿六

京 六曹

此七歌四下共

神鳴りさうらひらけー旦くれ

秋系や芒をすする青の面

三日月の等々十世舎光りか

鶯のきねは濡る小るくれ

夜しき日を撰出さるる其鳥

鹿鳴を度る事も旅のやと

旅人の羨ひとりし鹿の音

さふくくと小川を渡る四月分

鶯は山詠小帯る四月うら

松の世は歳雨もゆふりか

栞るほと栞るさるる西ふりか

駿六

土卯

駿六

森 尺艾

駿六

八千代 仙風

駿六

青森 菊也

駿六

京 蒼丸

駿六

香を踏くは草は新く山は
 赤くくくの記くは山家外
 神楽帯阿のきをすすまの上
 しを結ん衣やまのうろ
 ささこれの唐は松葉の立より
 裏所帯葉の花をふこつと
 白菊をふよと浦の管や外
 どのくゆや麻さうも足る菫の菊
 ほどと足るをい梅を再後
 あらうと雪の白梅現きなり
 松あれはをふも足る梅は

月居 駒六
 玉屑 駒六
 花散 駒六
 葛三 駒六
 左琴 駒六
 武陵 駒六

歌七の四下十七

橋りと人をうた守とのもや
 足るこのの中か一の宿り
 糸の松を足る唐の師
 むする下と松風吹て部
 春さききさうも吐きり陳穀香
 月を帯一五尺の草の陣より
 とちららむむうす芒の墨これ
 汁の草や山松引日の又すれ
 鹿鳴や糸のむねのほろく
 きさくくと人とのふも本下や
 人の草の本下や下りる月

越竹老 駒六
 壺伯 駒六
 京 駒六
 素葉 駒六
 関豊 駒六
 駒六

夕白や雲のぬちのうろくし
 きこのふちと七洲も船白鳴り
 雨の日ハ管も柳もぬけりけり
 犬の痛く形さ(杜ハ衣あり
 二声とかきりある麻の衣じ
 ほくきに花を鳴く衣じ
 月影や仕事は極る沙弓山
 浮き又月くくくの水川ハ
 生午のち根も衣の日影ハ
 月雲子表つるすや竹の衣
 衣も又衣つりの雲と物まけり

石毛 駿六
 宇宙 駿六
 竹里 駿六
 蕉雨 駿六
 春臺 駿六
 空阿 駿六

衣の毛のうろくし
 本かろくしやとつきり
 富士の山衣も音もあつり
 蛙鳴泣くほいっ唐のぬ
 唐江や丸うきりたる梅の水
 梅影や美とれ音の唐もり
 衣もや白いつき合ふ梅と襟
 衣の衣や地よも入るき襟の衣
 衣もやあめくと衣の襟知
 きー鳴く山をばあめ衣の衣
 きー鳴くそれりと舟のかき衣

駿六 春坡
 駿六 呂兆
 駿六 京 井涯
 駿六 雄洲
 駿六 雲帯
 駿六

蝶のりへ人もちりさく又ゆるか 如毛

蝶香のりへいさくすす月峯 京 月峯

誰ちらう山の井取く春の鳥 駿六

春先よき梅よきのふの蒼うち 春 春蟻

梅うさやしく袖くあり峰 駿六

正月や火桶抱きう名の花

四季の松よきえく遠き 長 孔阜 駿六

雪よほハ鳩の湖をそ月の秋

夕月の水の中やそ若葉うか 駿六

月丸く香る丸くねむりぐり

鴨一羽横よきねり音の月

夏の来いよも遅す山のうち カ 眉山

怪子や風よそを家舟の上 白 乙二

印くく舟よなをり幟く 駿 六

春中うき旅人けや夜の日 ト 對竹

高梅よゆあつひ音の春照 趙 島

阿香る南よあはの春照 駿 六

起けひて松よ鼻する男廉 白下 花陶

唱麻のをきうつしたる山 大坂 春人

山ふたうきうきうき 駿 六

小ふして二つはありぬき 名 女角

猿月玉田横ゆハまの風 良 平

銀河のや炭火のほたる松の風
 玉照や木うらうらふらむ山家の松
 春柳のや木影をやかりぬつき
 菊の露もこりさぬきほひうか
 春の柳やゆふ揚てけり豆袋の砂
 古ぬきぬ唇うや春うのうらうき
 初丁を一粒又配れ伊勢若尾流
 思はずの水の蛇巻や坊うし守
 仮初の水のあや光陰の露
 炭俵つゝ免い圓おなまきほひ計
 みか人の初を頼ましうらう

騏六

推巴

騏六

堺茂良

京雪雄

騏六

言 巢兆

騏六

史七の下の下三

あらぬうきうきうすきぬら
 ありひありとハ
 出る善徳和尚のよきぬりや
 糸そはとまれくくまれ
 あらぬく世よけれいつまぬ山橋
 人老く海山本の花志くひりり
 花見てもり善ぬまを席りりり
 善帳の紙は菊く写水鏡うら
 いか初祖父を序と門下捨
 時の白キり艾傳へたるまよ
 夏ふりし守

梅笠

東古香序

今更つ一海をうへいしつらなまゝぬたの
つらより 往來千里のかゝるよ
ねむむを 折うゝ 吾妻のよ
ねは 志げと 驚る 揺る 揺る
友を 南 部の 一の 訪は 存言 かり
乙 岡 あり 幸うゝ 益を 益へ 枝を
すゝゝ せん かり なる よ 本香
の 丹 丹 の 子 記 なる たり あり あり

東古香序

名古登の五旗うとてくまていへて
やまうてらふもさきよはじふ一を
のあゝ一帯の玉面の葉はらあぐなり
あまのさかともうつゝともはくそん
あゝ物あゝつゝてあされありま
そのまをなひく遊掉のまをあぐり
つゝぬまのほまはら 國家阿まのまを
まのまをたすゝりらるも程袂さぬは
そり 奉別

枕七次思十中三

かんたき

一巻うさゝ〜村のぬ 對作

卯月廿五日ぬいたく降く馬の
よきり南郊のて周〜まをまよ
か林て訪やふらる人あまは
ままの扉押拂ひさむらうの
たぐそこもな〜やまをさすひ
へぬさもら母〜いひたさたハ
さへらあや〜病ひさ〜起りて
孫よ山菅の葉のま〜清ま

おろくくゆる

ちよつと鳴くやうくさるる雲

五雄

之宝着升とうやうるるの

脊を走同くううるる雲

よ入家乙周々ふそんち山

まじつとくくく彌たの女

いとあー

あまのそと雲着るく膝を掛

大節

秘七歌四下世三

草の根まかくして穿ん果た

月下清ゆく露の弁の毒

藍染をそく後まよふて

は返しく陣するの夏

柿味香の唇をほく心埋火

衣ぬくくち膚たたる草のと

亀の歩けりもあつちなり

松空のまきまほひままきて

雪の解くや風ふかすうき

蒲公は乞食自慢をこきち

乙因

對竹

太節

五雄

岳嶺

松凡

松菊

大商

吐山

竹有

士朗

まら雁子橋よ月のさるらん
 休をたふし枯も情をこめつらん
 いりよ野の草をそみりうき
 ハ重荷橋を越りのかここま
 のそけいも登りうつれ人
 のふそをそみりあきり花うさ
 田のうさなくと申は古口均
 免つらうそせねねの様の面
 ねるうさ小敷よまらうむら
 きぬくをそねり雀よまらうそ
 扇うさあきし 赤笠の阿と

大阜 大巢 梅間 すみ 国水 鹿野 黄山 九峯 梁臺 更著 昨来

枕七の四下五四

誰ひより舟舟は笛を吹も夢夢
 いふともあくほの浪う
 白雲粟の風も星は出る物して
 あつらふ雲の癖を笑
 豆腐もちちく海もをうら
 世もうらほもまつ枯のあ
 厚海りく昔らるあき山の上
 ともまの 雲をゆく家 松 吟
 世のまをうらき名を名縁まら
 晴り追ねくあう 膝うさ
 岩山の丸くをうらわう 吹

東陽 沙鷗 月底 永完 青岫 谷卧 律子 阿城 左雀 土道 湖風

度々も〜と何やらも〜
むかし〜花を〜あは〜
離の山神も〜あは〜

西節
大蘇
浦且

一統七飲四下並

閑古鳥のまゝふ〜りのまの井
孫六うあ力〜のまや〜古鳥
可幸〜古鳥 ぬのれく〜も 海〜
可ち〜るも 写ぬものや〜古鳥
は雪のふるも 何ぞ〜古鳥
あま〜るも 呼ぶ〜けの松の
可〜 さまをぬをぬれ〜
多海〜 思ひ〜
あま〜るも 可幸古鳥
立膝〜 癖は〜
可幸古鳥〜 人〜

士朗
松兄
大商
徳野
松葉
阿城
可青
竹有
硯静
梅間
黄山

のむこききとしくときき海山
 今花むこきり山後かうんこき
 屋守寺の盤のわうさよ馬古香
 明やひきし月もも又くハ馬古香
 うんことりけく馬古香
 馬古香松かうつものゆわくやり
 けりやまは馬古香山後馬古香
 久んこき油きたる相りふ
 ものいけぬ馬古香をよ馬古香
 馬古香馬ハ馬古香馬りりり

青峨 着井 兔洲 除き 国水 可玄 佳雄 浦且 左雀 有残

松七次郎下七

雲脚々馬のう人をりつあ古香
 うんこき 虫の涌た系 昔 畠
 相ひきのこきり馬古香馬古香
 馬古香馬古香馬古香馬古香
 家一さば人馬古香馬古香
 馬古香 馬古香山用馬古香馬古香
 いさ馬古香馬古香の下禁んあんこき
 ひる馬古香馬古香馬古香馬古香
 うむこき馬古香馬古香馬古香馬古香
 山は馬古香馬古香馬古香馬古香
 馬古香馬古香馬古香馬古香

多四 月底 一草 駒六 栗大 都水 柏亭 墨樵 吐山 二虹 揚洲

煮りしりの節は竹たり末古古
 ゆきこびるハもきりも鳴る末古古
 吹起しきりきけい鳴るなり末古古
 鳴りよりきりきりなり末古古
 たりきりきりハ末古古なり末古古
 昔古古よりけいけいなり末古古
 一りきりきりきりなり末古古
 飛ぶことしも末古古なり末古古
 末古古なりきりきりなり末古古
 かせいなりきりきりなり末古古

沙鷗
 谷卧
 桂五
 二河 岱呂
 日 卓池
 日 推已
 日 孔阜
 東陽
 少汝

一六二

名古古よりけいけいなり末古古
 世をいさやとてきりきりなり末古古
 ともはのその乙周りきりきりなり末古古
 其みちひの因縁なりきりきりなり末古古
 淋

首十の垂々もこころよつ末古古
 世のちりりもあきりもけいけいなり末古古
 うんこきりきりなり末古古
 炊をともきりきりなり末古古
 末古古なり末古古のいけりうなり
 日 西溪
 大巢
 珉屋
 雨節

寺阿ハ靡もさくは可んお 名 八峯
 蟬丸の彦を阿くはな来古名 永宗
 かやうこ名なくやあここむ養の面 菊居
 孝子之傳ん月も今音の来古名 里相
 おの山峯は草来か之斬りんこ名 金谷
 関古名余の名う来く連くそり 蕉雨
 りんこ名異おてもやうりりり 日 崔老
 大名の和子呼うりり 日 徐艾
 常くともふ写りりかやう名 日 何頼
 常木の阿りりハんこ名 日 三替良
 あくい雲を神はた目うりんこ名 日 壺伯

枕七勢四下廿九

秋わくくの名は呼もり来古名 日 雁亭
 んこ名志のふのよもの扇りりり 出雲 苍藪
 乙因死くた家枕のくこよ
 東武の巢兆く方より送くうる
 みわりり并きんれれ
 来古やり呼や神日 十五日 巢兆
 乙因を引導く事
 来古の仏のくはよ来古名

まろ

其年一 地を花の心名の青

櫛

乙因

雪のこのれきさ姿りか
もろぬの門のそきり葉臺の
蝶を飛や海草のくぬ耳まつく
陽まやちしゆけに這ふてく余を
そき翹や女あるしの牛細こ
比奈道の柳を色くそ秋なり
もろむやこそをゆきなる豆の下

夏

常衣をのしあを花枝なく
一風情わりのや扇のうきやう
うの無や巴を四月とさほけ

保堂信ちもぬりそ利や葉の房
松風より松をきり松魚うか
晴の葉の風結きぬよ夕暮ぬ
旗のるや春うらうきあ古る

秋

身たふよ枯の袖風うすくをり
梅もそきそけをふくや枯の風
萩のそ風もたよりふほめらふ
まつ丁やされハ萩吹このゆめく
そ結たりぬきハらさよもよめめく
白川の雲ぬくまを相撲うれ

たすひぬ

久化六巳秋

春々卓池記

英

按

概七叙四下番三

ワウ金糸鼻をくらや富士の山
五日乃風り十日乃西
穂由ふ月ををされは春あそ
あそあその水を信とる合屋く
琴持たる静よ茶ぬりれ
今よすもたたる静りあやの
書風のふあそは静くそ
明り眉よはらり梅の香
小萩はむ種をよふ門の足あそ

岳祐 松兄 士朗 輪兄 朗 輪兄 朗

とふもろくおもはぬのさうひきき
 有るなき事をなすてはなやん
 月不字のりを残す 雪掃
 吉しりふ能くく見せハ 拾 岸
 阿け田の帯をなとふ 早 誘
 八子ふをくしとををわらうた
 立うてや 啼 雑子ふをを物
 左つ花の深小曇を煙らん
 取世の口をわける夕くれ
 幣田規志のこの幣田又ふ来て
 二重のまぬまはむ 張 笠

兄 皓 朗 兄 皓 朗 兄 皓 朗 兄 皓 朗 兄 皓 朗

批七款四十四

杉くぬの葉のまきまきを折まらぬ
 麻子すくらの大百合を 煮
 五百寺 寺飲りてく 佛 蓮
 温泉のなふつふ 務もを 草
 山 鷲 勢 の そ の ぬ け け 曙 小
 函 存 の 木 留 の 糸 羅 子 け け け
 其むくく 海人も 徒をひくく
 出をる 糸のくくくくく 誰
 秋風の月を起すき酒くら
 今宵ハ 麻子すくらのて 病ん
 鏡つらや 後の 破巻の 明日ハ 書き

皓 朗 兄 皓 朗 兄 皓 朗 兄 皓 朗 兄 皓 朗

黍植粟植を前ふて是人
川、多ふとむむと流を引とて
後、第の方をうらけりて雲
あふとて、花をきよの影をく
念、月、ぬぐゆき、きゆ、き

朗 兄 祐 朗 兄

月と日の名、小流り、雪の山
雪の白ひは、明、秋の、夜
筆、枝、板、屋、を、唐の、室、中、へ
袴、着、ふ、り、も、つ、り、や、り、り、と
五人、持、お、ま、の、ふ、け、り、る、牛、の、声
竹、の、ま、ま、の、ま、ま、む、む、む、
う、そ、ほ、ん、と、ら、ら、と、出、れ、る、古、子
娘、を、西、へ、魚、の、川、水、う、り、と
着、り、着、の、浮、橋、を、た、ね、り、と

士朗 岳祐 松兄 朗 兄 祐 朗 兄

神のあまの長宗ありくは
四十ふをニラたりくも花のな
解懐おそ子母極る等 尚
又あまの月澄けける雲の水
佐工よむいそを傍寐すらも

松兄 朗兄 務兄

おもしろあとの言まきえたり不の山
抱懐くある海をくくはまき
歩百くともを言希うく松の花
む月ハらの言くくの月
離のあまの言くくは目ハ終り
おもしろ持くく歩り勝るけ
松風ハあま住りくと吹やらん
くらあまくと育つらるる子
鳴神の言くと言を木まつけ

松兄 朗兄 務兄 岳松 士朗 明兄 務兄

清先如中ウ歳むれり事ある
多むら又扱たる身を踏く
急の船戸する朝魚の花
玉解のぬりを鰯の母をけ
水子ん流す 粘め 山 万
逆くよよとまき蓋とる飯の泡
極ふとありく寺の船 方
大車とはあそやしたる墨喉
曇と面を阿をに暮の日
常子水すくむすむあけ
人をやこをく腹引をぬく

概七初四十八

兄 格 朗 兄 格 朗 兄 格 朗 兄 格 朗 兄 格 朗 兄 格 朗

あつせ障氷鬼の莖市とる
櫛の紗方をくく 栞芦
似城ハ眠るるもあつせ
月々出とら泣ワクせ
きりくは蟹よ子時箕よ三附
茶の末の上ハ書 ぬとあつ
夢の事を観ひすあつせ
志加るの果をささふ 鉛筆
烏めり底の板を踏こく
師走廿日のまつり
あつせり大やき候をさす也

兄 格 朗 兄 格 朗 兄 格 朗 兄 格 朗 兄 格 朗 兄 格 朗

牛色一たる味をくあり
 笑ふをうけし嵐の月を賣
 重世を少く山吹うけく
 塗若の根をさす花曇
 袴もあはぬ懐色の 見

朗 格 兄 朗 格

批七於四千廿九

阿けりの一花よりよまとのもほ
 月と花とをうけりたるおまが
 月花の束はむつかりき風持
 老若よと人の接たる 横
 このいふ花はあはれ小言
 との花結をうけりたるおまが
 輪くかりて梅もひさしける
 梅さくらや梅さくら 梅さくら
 梅さくらや梅さくら 梅さくら

岸杖 雄渕 松元 長少 椿堂 玉屑

小供等ウ一むちち花と梅ツ花
名つ〜〜花でもあてうめと花
門ちく〜〜もはるよ梅と花
半馬よ正時さる〜梅と花
船鳥や〜〜屋敷の取ノ尾
あさくち花を山を母のやり
朝鳥よ親の〜〜き雀が
松ひす〜〜花見と立はる

平海
牛彦
松元
茂良
崇居
松元
妙女

小庭の春をまの白の敵うは
美の美とあつけ〜〜と
ちいさうあり〜〜をや〜あふ
いやはや〜〜大ま〜〜なりな
ともをひ〜〜たよ〜〜と
たすつす〜〜たよ〜〜は
は〜〜やき〜〜つ〜〜は
ね〜〜と

ゆき出よ〜〜を今昔の夢のな

う〜〜と
う〜〜と
う〜〜と

さう〜〜もあつ日や花ハ花
花ハ年〜〜は花あり〜ハ花
一夏のさうり〜〜年〜〜

士朗

春のよるをくさくさうきくさく

あやうりよまたたそよ花よ又と夜

まのつすむすするほくと歩む花系

月花のなかりまのや池の舟

ちよのつやせはよくまね守花の陰

花さうりそ争うぬる人の歌

大席吉よ傘ハもくぬ山梅

ともくくもうきよ花よまら下

花よ阿くぬるのちさうく山

さうくくくくくくくくくくく

牛橋よ能風よめら草蒲ハ

松凡

米彦

西溪

休呂

旭亭

松翁

曹陰

百堂

枕士於四下里

訪隠志

任くくくをくくくくく

伊賀の虫よ住くる傍の事ハ

一食のたくりくくくくく

歩りまやまぬるのくくく

そすくくくくくくく

くくくくくハ四方大海中

日ハ何さうたぐくくく

くくくくくくくくく

あくられくくくくく

鹿野

かなむるせうせいのの只口をおきそは
 母ををきりて乳房をおくよ
 せせ出る所よりせんそをひて
 食物をひきけりんやあつりま
 せのせりりりり

口噴きりてをせは月日候をよき
 くらんせはらんそつり山さつり
 くらんさを愚癡はハたり山様
 旅のきの十日もつりハ運さつり
 夕多や雲入ぬむのうつりよ
 香を消てく菜よやとく山後

松兄
 宗巴
 吐火
 瓦城
 石毛
 月居

枕七級四下里

白くらのちや胡蝶の一そり
 ちむらやあふもひとる花のさ
 佛生りて十日もたれり花
 菜の花やまをくつりちを
 ちのちのかさなり山はつる丸
 ちまな菜の葉の中や枝の毛
 枝の毛の枝の毛ををり
 葉の水のそぬは世や守めの毛
 沖の毛の毛くちを花の葉
 ちく山ハ何う障やちをさつり
 ちのちのちのちのちのち

鳥翠
 夜車
 松兄
 六曹
 珉上
 松兄
 汝素
 来起
 天老

腰乃泣螺董健むふひびくき

乙二

よりの西行房あき

月花の如くおとをきき、房の

松兄

花の如くおとをきき、房の

多折の如くおとをきき、房の

走井あき

い水はせうひけりとのう山さくら

ちらくとすするや芒ハ萩のもの

花芒の如くおとをきき、房の

いこちやすることなはる事業を

あき手之や多折の虫の這ひく

漫て

柳童

墨山

外六

そ女

秘七幼四下三

白菊をさしおろす風の風情が
里の子の草花よりの九日うれ

松兄

雪の雲を横きりて

い雲ハ梅りやくていをらむす

山吹はあやしくあはれ、房の

又馬天ハ茶を名は進を本は

たれの家よれせたやふんうの

世のふもいふるしぬものやう

金きぬぬぬそのやうあひら

るうさしふやさすあきそ珠の

後くやうき

月花尔わつに控ふ鳥也

花の上小蛇取りまれのあつし山

草より多池や枝まけつる様の面

松屋花多糸魂のこつりき

常の三葉は入替うま垣おけ

うらひす小橋多き小室くれ

常の少種つらん心ふくり

うら文ひ寸の月夜といん組納

鳥の常をまるとも鳴くを要あれ

燕来て祝けむうゆる草鞋ぶ

龜梁

金石

駸六

宇洋

葛三

吾友

松菊

了国

孔阜

批七於四下雷

子雀の人よあつるをを秘あ

うらとすくをきくをあけへあ

きれ春撰のまハ世を字法山の

うこのことまけハすくあけへ

らる時ちも年を替りり家

をあれハ一をを字でとあ

再見あつるををあも言ねん

海崎く葉うらあつるやとま

る常の返事すくせよ子規

おし月をあつるををまき

まをひををまきやとま

大阜

松兄

重幸

元日ハうま〜二日ハ面也
道もこの柳を志とく竹馬
まはるあふま〜ア〜ア〜ア〜ア〜ア〜ア〜

人日

老ぬき〜し〜ふ〜喰ぬ 芥 荻
元日や先うら〜うら〜き 東 山
蒼蒼華は苦むす 高の岸 日
まを神を水さうら〜さハ何小所
まををみぬ〜く〜り 猫の島
藪又や類 白類 赤の籠 挿て
ま風や伊吹 石も〜を 籠さり

大左
古猿
圃曉

素梨
松兄

智圃

枕七歌四下六

その口すれ〜て 面也 春の風
まぬゆををかりふ 鳥の家の坊
樹 宿よふま〜も入〜り 泣 泣
あふま〜も 志 志 志 志 志 志 志 志
や〜せ〜との 籠 籠 籠 籠 籠 籠 籠 籠
鳩 鳩 鳩 鳩 鳩 鳩 鳩 鳩
衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣 衣
さ〜〜〜れ 柳のぬけ〜る 人の白
あ〜〜〜 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥 鳥
蝶 蝶 蝶 蝶 蝶 蝶 蝶 蝶
江 江 江 江 江 江 江 江

其 映
尺 女
一 之
太 節
松 兄

吐 山
巢 北

丁卯七月既月梅を花園の妻
み老をひく其数をあしうふく
ついで一白井の桂玉帝皇の岳格
花瘡のす汝をり強うつるある
人の鹿野天老葛井大藤五道
五雄の徒をりあの日の変遷よ
浪田の早稲のいよこ居も吟
さををうる詩の抄のをりよ
淡ひ不二の香のくの花のこく
あつて茎のまををほほよ

濯てあきをつむ酒ハ伊丹の
白茅の若の海の小海老を蓬菜
鴛の蓬よのせをせゆされらる玉老の
翁孫日の冥よ老をゆきと園中の
月よ我れと玉母の柳よ疎るゆゆ
あつ面おのらふのねひや
糸のよとらるる小屏居杏兄記之
幸よりハ皆家又よ玉中のつて
七夕の葉の夜の夜ありたり
七夕やほくよる葉ふ葉の
縁よ五日もあふハを蝶のさる

夏の東はまの山のおうん山の
 とをすの常のまのくと修治の
 川島のたの海をゆくりの菜摘
 等しの若菜のほろもや香の
 すつるのまのまのまのまの
 如月や寺をみるまのまのまの
 まのまののまのまのまの
 志つるまのまのまのまの
 うけろのまのまのまのまの
 まのまのまのまのまの
 芳田の橋うけろのまのまの

眉山
 介亭
 祥禾
 奇淵
 松兄
 蕉雨
 東陽
 梅間

批七初四下四九

橋をほす橋もを修むゆき
 橋はの泥のまのまの
 うろむくまのまのまの
 おまのまのまのまの
 菜柄のまのまのまの
 まのまのまのまのまの
 まのまのまのまのまの
 まのまのまのまのまの
 まのまのまのまのまの
 小陽のまのまのまのまの

松兄
 梅丈
 李東
 李基
 周瑞
 桐栖
 有斐
 芳之

合のころひ時也 冬にも
 仏子ハ之端たるぬ 許してま
 を ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち
 祖文はあゝ 孫白髪光りて冬の面
 庭ひかりまらふ 湖 水 の 入
 ね づ づ づ づ づ づ づ づ づ づ
 田舎とくくさりとハ雪の降さ
 古鏡子名を小粒とせふりり
 善ハあともくそ 塚の孫あるるよ
 蝶 三 蝶 や 蝶 新 一 把 も つ ぶ た け
 川をこよよ 名子おたり 凡中

秋玉 砂文 松兄 稻淵 兼也 推已 采貞 左琴

一紙七約四下年

任の江の宿子浪をき 解主ふ
 金谷を先を車とて 因り 二人
 旅立日ハ六リ 十五日あり
 又ハ けきう守のそる 様の涼くま
 雑々の極す 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 井秀亭よま 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 首をさす 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 知 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 旅人の目 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 雲や 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一
 たるふを 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

布舟 松兄

くわんじつもなぐさりくちのき
杉年丸く味をすちすし 石
ゆきくちのくれたる 豆屋串

喜年
如毛
希言

せつりもつていりていり

きめふくやもゆるし 水

菊むしりくちと様しき

たふく 鹿甫老人の退慕の

序なすもいりて

卯竹魚子より 松はちる日か

松兄

まつりくちさけうま松ハ静や

素月

油買へ塩買へと 隆時魚子

松兄

批七款四下五三

徳富の白髪もいりて生海菜の
きくくちり一日きり

如高

木くらりのきのふはぬきぬき

大蕪

あきくちま 枝ねをきき 樽火の

表河

炭の香やきりも出さるる 松屋

不卜

清澄の水を煎るしきりのきり

松兄

花をきりきりもきりていり

日一の年の飯はきりていり

お飯茶屋飯のきりたり

きりていりていりていり

つくり花に風は風をきり

あらうくこや眉よたかたぐふの月
 其成 文曉
 杉の葉おろそきひまより後の月
 于當
 喜の月心通の屋をこぼる也
 湖風
 糟るハちてくそぬれ船の月
 渡草藻
 思ふとさつそり控くも冬の月
 蒼虬
 戸口くらの草の浪花や冬の月
 五道
 海子水くさよりそふゆの月
 双南
 舟子一ふ尺の草のへそそより
 儲史
 香けけの浪くそをんぞ、夏の月
 かつ女
 葉の花のひまのささく夏の月
 大商
 舟子よきことのなれハこそ夏の月

批七款四十五

山をゆく四あ人舟のさよりけ
 河城
 何ゆよ人ハくくそ冬の月
 畦間
 舟ふゆくそおさななそふゆの月
 松兄
 危舟や砂のあゆこのそくまき
 岳輪
 喜の月ひくくそそよまゆ

樗堂

世を捨てたりさるの山路が
 花影を言するところの水
 雲霧の音のほろろにみちりて
 家ハ古風の軒ひらき 月
 物井桶よ小葉の白ひたる
 晴掃ひとつゆきをさや
 流る衣雲の境をよはさ
 暎よ三笠の山うけをくじ
 本うらみの押合ふをさるぬ
 雲のむらうの霧うらみなり

士朗

松兄

岳輅

朗

兄

皓

卓池

五雄

蕉雨

秋来

枕七初四下季五

あつけまきいそは繕袴脱けけ
 うこのまのふの焼たを 位
 五月の山は洗ふくろ 髪
 龍崎の井の根の乾るけ
 苔のむしたる石をつりぬ
 梅の花赤いときりも折きて
 喜の月夜のおわれ有りける
 鴨うらる 常田の町家の障の考
 昔よとををうらり 山 休
 字のよよあはる 具足のちきれる

朗 兄 珠 池 雄 兩 系 朗 兄 珠 池

批七勢四下事六

人立ちつるい系陽 花の 歌
 おうすり拾を舞う程をたさすれ
 むらぬとつふをを たさすく
 山吹の秋の障とや作ぬらん
 いとりの木をささく夕ぐれの月
 解鳥の雀門 昔は押ひくき
 誰か持きたる夜やまこころも
 系は操ちりなききやまはるや
 松さひいふは 沼折の 玉
 下結くくくといれく 袴を遊ぶの
 日和りのまに 因・糸をやく

雄 兩 系 朗 兄 格 池 雄 友 系 朗

あつりありと見せれハ水の長き
まきものさきを柳より
花のさきハ鳥も嬉しくり
まはるゝと希とつくりふり
唐

兄 池 雄

文化六年

己春三月

